露のうき世

全

特別
へ5
6590
19

へ5
6590
19

土左

南洋著

追善

露の浮世

高府

花全考訂

序

天地冥合の紀機ハ自用彝倫の変化ニ
任せる自然の勢ひ有り是を云の業り
あらしてハ鬼神を感せしめんとハ志士
の所ゝ所やそこ動るに乃ちて誠ち
かゝしめの事を自ら用ゐ為して
是を得あり宣哉三百年間の一人
あり事ニ石川鬼白義ニ時月ニ

嘆きそこ小聚彼類あり彰て五十年の
練磨を加へ俳諧二百年来の面目を
いさゝか惜む寸年七月電光石火の世
をさまり乗の一章小一大地海界を照
し鬼風家の郷史とあり先生あるを
もらの必滅を滅して徳光の万代を照さ
んか生涯古哲も新あり今茲
忘辰再新されの悲哉の須臾中山の

鬼毛小灘さ早く追崇の小冊子を賞
白うる者みして言さゝ荒あくして
天然の妙を深くる事を弱さんとす
霊魂然くれ吾輩の志遂小世さるの吟
章をうみもくうゝれもこ絲小反魂一株
を拾うて天保十二辛丑のゝ毫を小
羽を加ふ

長和軒
延志

いつわし天保十二亥のとし白子追悼の
詩歌を綴り終て回向の業終りを告せ
辞世の一章を樹末のちせんとせられ
しが其父鬼十子あり十子もまいく経
あるくに大石紺の袴を着り終まねし
故の己ふ攀ぢる悼かるすや今亡し新屋を
除き年ふ勤り事の廃れるを歎き聳
角洋ぬし気を果さんと行西を手了

嗚呼吾家にありて其始末をしらざる人の
ながく續きたる俳諧の道をしらずかくれ
とくとも榮えも又かゝれし諸子の芳係
此風に親しむる好みも失し今又是故に
珍しとすれとも早業名のあとを残せる
あり俳門を出て絶えずに経て人あり或は
名利の波にさそはれ又は世業の窮情より其
吟章の道よりかくれんことを好まざる之

きゝるもあり故に唯辞世の一章をなし
其絶たる大に暁す故諸君の續く志し
玉吟此冊子に入るゝを撰者の眼に
あらきをゆるし玉へかし戊申のとし

遅日園
花全伏て申

辭世哥紀行

[illegible]　　兒白

[illegible]　　北舟

[illegible]　　華山

[illegible]　　望水

[illegible]　　樓加

[illegible]　　掬水

[illegible]　　素白

日和

雨のいとうとうしく傘ひきかけられたる

義理もおもたくもたちぬまうち

茶石

蘭窓

弗洗をくもあらためてるかり

枝を折られし跡ありの身

瓦石

菊洋

ゆくてうの跡ひきしるしあめ

林枝

花園

一生の恋を咎よあてしめ

梅隣

三国とあるとをたみのるとぢ

松雫

花を清しに日を暮るの

名橋

赤英

糸垂柳く青ゆかける花の姿

白いとうるうまのこころ

松石

竹をもて植とあるゆ一ぬ

成堂

風かせあるれ松ぬとを

松陰

世紀いとあ人のくを思うれて

佳水

抱へ揚てもゆめそら雑

如水

門の張ハ青のまゝある通り為

古仏

千年を無事に過す樹の姿人の
五風と云て越後の国名月の
拙句に
のくまなき月の光かくて知れる
稲をこき
こゝ
折節の塗の乾る多き
絵合の書ふ
楽ふ才なくして
化をよろこ
稀まれ
景のあし
景数時
素琴
潤水
柳石
里川
梅枝
三枝
玉泉
柏枝
夏柳
里扇
如仙
延志
利北

追悼

我小菊逝の吟友あり名を兎白と
よしとしられの性ちうの気質をは
うしいるふまり交る事久敷
のれく其の日の生きもかれうるり
志れ玄の月より堪くきも是うるを
淡くうの子一基を綱と呼ひ名は
名を招くうれく日夕吟事もなうる

しう今年水無月のうるの業感ふあう
されしうる月よりしいうきうるを
ありぬうれやみぬれを伴る自して
望の結ぶるのまうのもうんるを祈う
とる天業限りあうるや好乎秋中の
二日といつる日百年の年秋を以十とせ
余り九年を経うる嗚呼ひるやあるのを
おううを中ふも天然を変うして和尚

あるき人らの福麿の後ひ去限りをさ
とりひろくしら弱見して高の光あるこ
迫く拍子を多まる須弥の高見と一
章もうたに教をとるとうて世界
の境と入る無後を名我が代り慈父
を補佐をとつとしく見を示し今へ
半思うう年より高傑て驚くよ
事にはるしるの余況と述情の

一章あるうとうを在あの人を慰ら
京雀を知て性質あるていさ知ら
哥首を待待あと感ちうを父
あんからうにありてうが知れが
ちのかうしもあるう喜志あとう宣
しかうんもきき世にちる母妹の後
孔あるも待へし兎角ここふいめ
うと悟をとをいと蛙うが彼一句

をくりてはるかなる
蓮華のあるみちまでのあるかぎりの
あんをを行る聖をくん無さくんや
はし流と流し例ありさくに作くな
みしくんなふも君えの秋後らぬ
し況や骨肉胞の上に於てをや
をくや蓮華を待を止めて追慕の
結縁を営うく其文墨にのそくを

九

かなかさを思ふ未の夢を機さよりふし
るのあるらまをかいつるるをも

花全

ちしあえぬ独やうろみ月の雨
あるに中堂あるを分をかるつ秋　鬼十

右歌仙行下略

門人鬼角の別を悼し

そよぐ葉や月先を通る秋の風　旭松

法の七字もかひなられぬ身　南洋

右全下略

文月中の三日男鬼角を失ひしう
ぶらう弱のひまあるてたちや七日を吊

七魂を送りて樹下に上をたなうし
碑前ふいうう

鬼十

法ふ山人生まるる生まれあうれ
終法ふ〜ありうるうう法も　旭松

右八句表下略

父子の孫ある鬼角のあるに子う一うう
の杖ってあとで坂の杖と生まれうみ

さくらの花を学ぶの風を続れ二十とせ余
ありしとせしを兵一紙の学をもとめぬ
為みてしてうつ点をされぬ雑歌　南洋
年毎年毎又明て雲もみつ雲もまり
うかりしにもいつくを過ぬるの白雪の
多たり金沢まつ今ちまて
あるき相の一年ふる雪のこゝろを
ゝる地のさうに見白のわ十九とを

学てこゝ年一年の学を学ぶ人と
されや世の世に世に一望十余万
戈を色ゝ学ぶ月を終てとく交
工用を動人てを考きよるを思ひ
出てを風流を東坡を考て文万
学を学ぶ深て雅の万自
然を深ぶるの生れ万を賀分
らんさるとて年とかゝしまるの

[illegible]

嗚呼惜[illegible]ん惜[illegible]ん[illegible]

又[illegible]子[illegible]手[illegible]の[illegible]を[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]日[illegible]の[illegible]

[illegible]や[illegible]の[illegible]

[illegible]田[illegible]て[illegible]り一[illegible]

北舟

柳石

里水

素白

鬼白のぬし[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]を[illegible]

[illegible]日[illegible]月[illegible]

二日[illegible]一章[illegible]十[illegible]

[illegible]世[illegible]果[illegible]惜し[illegible]

[illegible]の[illegible]

延志

女無明鏡不知面精粗士無良友

不知行虧踰可謂士歸要矣
石川兎白城東農街人也性
溫柔謹素以孝友所稱家產
之餘暇富滑稽道筆鋒雄健
詞陣風流奇巧出人意之表親炙北
齊翁增有聲余意望日久偶會翁
之北陵亭俱談俳與余意於是相面
會之晩遂頗意禮待相交可憐名器

雖光勲業未融今歲辛丑六月罹疾
祈療無驗以文月十二日下世受齡十有
九歲嗚呼哀哉天假年何奪之速
也同社之交爰無復北子自今而後
情與論皎々眉目猶左目前不覺
淚灑於閑窓机上

窓下兎毛洞て煤の多　華山

草中ハ鬼隠れて月白し　天高山普泉

白地遠き岸に秋風　潤水

百ケ日

雪しるる宣ふ魂ノ百台　北舟

ふるふる歌の詠るこのゑる紬　鬼十

右百負下略

弥勒へさまめぐる日数ハ　花全

ひとしく去し秋も夏の間　鬼十

右歌仙行下畧

一周忌

夕月やふたつ文身の室ふる　掬水

花ハ散ぬ葉ハ残る桜葉　支燃

右歌仙行下畧

ふりうせ雪ふる雪も一巡り　花全

心よりかも月のあり　鬼十

右全下畧

追悼の各章餘ハ畧〳〵
各線を載さて

名録

一ちゃハひとちゃハちゃきん　當所連中　赤英
花の蔭るきんぢゃ森えう　花園
花波のうゝも静やうゝ茶　瓦石
七竹や寺子の花ゆゝ多ん　松軍
いろ栗やおくるさまゝあゝ　林枝

雨雲の晴上る萩を千鳥哉　梅隣
ゆゝしやうもゆゝしやうゝ　里川
挑上る簾ゝ月の秋涼し　茶石
干傘ゝ雨降かゝる柿うり　蘭窓
柵のうゝを月ゝ咲る哉　梅枝
ゝゝくまゝくさゝのゝれ哉　名橋
豆腐ゝひゝ付く厨の蔦葉哉　玉泉
盂蘭のうゝゝ石ゝ帰　成堂

行春のうしろ姿や書一冊　松陰
蔦紅葉や磐ゐるとみるまでも　松石
雲の月清くゆかしうるまの弓　古仙
夕立や川上くらく月のみ　素琴
紗帽冠れかしこもぬるしたの風　如仙
水仙の葉の力もまてゝ柔　佳水
白菊やひのまくれなゐ空さく　柄枝
うてもなし俳諧しし時鳥　里扇

梅雨の海ぬけて白ちゐし天は空　如水
ゐハ蛭除の義ゝり捨てわ行婦人　之枝
何為ゝ角を上ゝて鍋牛　橙加
蛇失の銘ゝ高く雲ゝ雨　夏柳
名月や義を立てし横の朱　利兆
毋牛乳の絵ゝ立ゝまる横小　潤水

○

新らしき笠も縄しき雪掃小　古川
桃渓

枯葉やあられ穂ぬる花ぬる　　尾場

舟かけて炊くくくりや夕霞　　黒宮 玉泉

待ちて萩の目もうるおひ　　伊野 月涙

竹の葉ふ雪の力を生葉哉　　而楽

枯葉や入日ふ鶴の踏ふ　　清曠

真ふふも見ふ佛や佛甲　　暮花

芦解やのうる星の解ぬ　　景仙

元寺の読手てふきうふ　　夏甫

ふんてふて流る橋あり山ふふ　　古甫

ふふ星屋ふふ星屋ふふや姿のふ　　笠 月下

捨鶯の水撫し出手屋ふ屋ふ　　知伯

角力ふふ子供のたふる風ふ屋ふ　　松和

行ふふや屋ふふ舟の渡の弱　　徐魄

春ふふふ月ふふふふる生ふ屋ふ　　出間 四春

ふふふふふ秋の寺切る桔梗ふ　　高岡 環之

苗代小世貝あふ人供ふふふ　　素月

毛物黄小二丁ばかりなれども　似梅

水鳥の苦をなやまるるの中　戸波　只隠

菊苗やまてまて抜るなり　名溪

紅葉の風ふるる中のひとうち　知足

風小枝ふめて音新しうち　里笑

黄菊の酒うるあるの日和　陽谷

さまれる葉ふるる山路のうさうす　羅

行庵の門を歩りやうの月　大埼　映花

咲て枝葉あるるや葉のうち　兎花

月ふる行年の出るる橋　抜耳

園の菊さひうる秋を新れうち　比江　季山

朋誉る葉ふるや立ちの音祭　改田　蘭石

葉枯や荒のうるる猪　抜　璞斉

枯の色いよ〳〵青し夕る葉　里伯

葉蔭網一村就てうなうち　松二

和歌やや地ふ葉なて消え急き　田村笠　一嘯

之秋やきのふもあしき雨あり　可水

雪よ雪の捨めて降る雪面哉　文雅

日永逢ふこゝろやく雪佛哉　笠　三周

つる帰もいとあり老鶴こゝれ　中村　魯仙

雪やうつくしう雪の雪自然　世美

帆よ雪る風に白きを青嵐　固梁

打く水鶏世守ら夢やうつくしん　龙岳

帆柱に身ふる紙や時雨　松園

窓の月ちらく仏の歳暮哉　魯三

五月雨や鶏の上りし板庇　宿毛　卯雀

俳舎利とのもて蓮の浮葉哉　笠　眠之

五月雨や巌を結る苔の音　入田　登農坊

夏枯小志の昔や苔乃雨　佐賀　来陽

新苔のまつけて新に暑れ　五社　清里

傷ら水く衣うけ夕納涼　笠　貫山

白砂よ苔砂かく月和清天

蘭の葉の陰や陸るゝ夕附日　野田　湛洪

毛剛や紙屋の香さめし蘭の狗　龍二

山吹や弱りうるまゝくの庵　山田　文志

弱弓や思ひ出さるる天地人　菫紆

開く時地の動くへき牡丹哉　甚舟

重さに気ふ交のちかるさゝ哉　物部　自若

行燈や沙ひかゝ捨ふ舟　後面　素琴

嘯くふふ賞あり和歌　十市　欽古

藤の花乃古あるゝやぬれ佛　昇六

梅ふり紅さゝ流る夕日哉　梧風

千年の滝ふふ毛ふ絲瓜哉　亀涛

水紀ふふ雨ふ後の雨ふし　赤岡　我多伝

今年年ふふふ泉ふふ　知還

葉の戸ふふふ菊の花　女　たの

鶯や蛙ふ笠くふの音　和全　牛松

月の出て桂ふふ家　琴松

物うらんてゆくさ浦の小舟哉　赤野　十雨

苔の垢洗ふ山あてあるる花　如水

ひらを剥くく新緑出る小蝶哉　安喜　楽之

蛍や降るよ居る井戸の底　安田　吐虹

苔枝毛のぬれやすの雪　田野　巣山

催ふる雪ぬれて雪消し　米阜

雨ふる雨降る芙蓉哉　奈半利　旭山

憂むよりのぬて寺ぬや出　益三

海ゆく鴨や波の夕月夜　魯卿

精進の海て新ぬれ蘇塵哉　久礼　帯河

粥貧の減る時ぬ〳〵小苔哉　須崎　青宇

干魚も新ぬ数や年ぬ市　旭扇

雪ぬ〳〵ぬて生る小鮎哉　宇杉

つの月に暮て多の月夜哉　雄夢

借て寝ぬる足遠や夕時雨　石立　其石

ぬらつゆて世を結ぶる新ぬ　内郭　集和

文庫徒り重き古山うれ　　左経
雲もあさくまあり秋陣　　不石
物を知る人菓子清〻蓮の花　　素水
よしきりと人を名を呼ぶ侍士小　　坎蛙
黄刈や新鎌の刃の白の光り　　辻柳
撫子や水のへりたる白川原　　樗山
竜胆やあらく尖のちらばり　　壷爻
十六夜や墨の通ひ小来山　　高知　鳥水

和歌の浦うらうらうらの嘆の風　　青二
二日月の上を舐めうるの雁　　北子
文ちらす風の知るあり嘆の月　　穆風
蛙のうけ鮎追舐て走りうり　　歩牛
掃よせて土小屋たや花の菱　　挑雅
蓼小茎くるみ蓼られて二日灸　　竹塢
龍胆の名を打ち龍物羽錦小　　其松
花芒月の末下を過る小　　呂石

言こゝ〜焼る所と富そこれ　支撰

牛蛙て蛍の姿かなこゝ　桃英

ふを持〜鶏こゝも乙丙　池翠

蛇ゐ〜や葉の色の笑〜時　井苑

風涼のや笑こゝ来る日の白　筑涼

梢まて霜〜鶏かゝや旨魂　梅泉

一浦を繰り掘るこゝ小　新橋

風あれて月ゐゐこゝ雪の雲　只常

月の御ゐ〜こゝ蕎麦の花　立臺山

立琴や打り七日の月　静　吐花

蕎麦のこゝ三花　夢中

涅槃会や笑の風も長ゐ　好古

行こゝ中繰こゝ清えて聖の花　松窓

和尚や牛を立こゝ風も良　同麓　松翠

炉塞や窓りさ中竹ち枝　如泉

簑虫のこゝみち矢て抜小月表小　尾戸　月海

鬼角風子ハ家君ハ者を出し
給も又風雅ハ人和とあひ協為
内ハ名を聞くに、へきを敬弱冠ハそ
遊に世を去わしの訃きゝ驚き老情
の歌をくもあに捨手て思をのつる
新蕎麦ハ玉鬼きらうて西の空

八十二度
遅楽老人

舅故鬼十のわゝ天保十二の年
男鬼角ハ遠別をかけき遊ゝ
その年も又人ゝふとゝ悔ゝる
ゝ鳴呼女舅や性温
和ゝて茶事ハ俳諧と業餘を
乐まれゝ世ハ新色人寿ゝき
きれゝ浪の閑窓ゝ追慕ゝ吟章
文章ハ金ゝまれゝ色を角ゝ集ゝ合せ

もの せんと 或 夜の 茶話 に 震 涙せ
しう 父を そこなふ の 迫 悼 に 添 へる
事 の 彙 鳴 ある を 知 れ 見 ふ み
薄 ふ 別 んと 一 変 して 愛 ふ 唯 一 章 を
あ け 舅 の 和 念 を 繕 て 鬼 角 の 霊 ふ
慰 んと す る の こ

うき 秋 を 我 分 ひ と り と 思 ふ 南洋
ら ら 人 間 に ひ か き 暮 る 月 花全

稲 雲 の 稲 も あ ら さ ぬ 年 か な 延志
蛇 蛇 と も 名 る 赤 ら ん の 名 里水
武 士 も 弦 の 本 ま で ら ら さ ら て 柳石
好 ら ら 求 ら れ る 淡 盛（アハモリ） 素白

右六句 表

つゝ牡丹集をとり返してみる

今こそ知る如露亦如電秋の暮　微髯